1987年 7月25日 78号

中村　哲・尚子
Dr. Tetsu NAKAMURA
c/o Japan Afgan Medical Servic
University P.O. Box №847
Peshawar, N.W.F.P.,
PAKISTAN

日本で最大の発行部数を誇る○○新聞の某記者が「取材」にやって来ました。カブールに3週間いて，今度はペシャワール側から情勢を取材するといいます。ここ数カ月カブールからの避難民でペシャワールはあふれつつあり，我々は多くの人々の実情をこの目で見，人を送って定期的な情報を集めているので，物価から飢餓状態までかなり正確に知っているつもりです。

「カブールはいかがでしたか」と尋ねますと，「静かなものだ。ペシャワール側の情報は偏って信憑性がない。カブールから人々が逃げ出しているというが，戻って来るものを勘定すると減ってはいない。国連の援助も一方的だ。あと1年たってもカブールは陥落しないだろう」と，ペラペラと「現状分析」を披露して帰って行きました。きけば，自分はカブール政権のナジブラ大統領に会ってきたのだ，とジャーナリストとして手柄を立てたように得々としていました。それが彼の自信の源のようで，小生はこの記者のおつむの程度と由緒ある○○新聞の権威とを疑い始めました。

彼の目の前には，カブールから最近逃げてきたスタッフもいましたが，彼は尋ねようともしませんでした。カブールは迫りくる飢餓に市民は脅え，小麦粉，砂糖，肉などの基本物価は10倍から20倍に高騰，まともな価格で配給のあるのは政府関係者だけなのです。カブールでは医薬品も底をつき，混乱に乗じた買い占めの影響で，ペシャワールに居る我々も，基本的な診療に欠かせぬ点滴や抗生物質がまともに手に入らずに困っている状態です。

街頭では，捨て子があふれ（ちょうど中国の残留孤児もこんな状態だったのでしょう），ジャララバードやその周辺の戦闘では罪もない女、子供が死体の山を築いています。

ジャーナリズムの使命は事実と真実の正確な報道にあります。僅かな取材をネタによくもこれだけの自信をもった実情分析がひきだせるものだと小生は驚きます。事実と真実は異なります。当の新聞記者は，象の尾を撫でて来ただけの事を気付かないでいるようでした。

僅かの実地検分と後は借り物の情報から，「真実」を勝手に組み立て，事実を自分の意見としてもっともらしく見せる飾りに使うのは，日本のジャーナリズムの常套手段のようです。怖いのは，当の記者もそう信じて真実を色眼鏡で見てしまっていることです。

「君達はどこのムジャヘディン（イスラム戦士）の党派に属しているのかなどと変な質問をした上に，カブールの現況解説をして，アフガン人スタッフの失笑をかっていました。さらに，犠牲になった人々の事も忘れてこの戦争をまるでゲームのように軽々しく論じ，小生はこの軽薄の輩にげんこつの一つもかませてやりたい衝動に駆られましたが，馬鹿々々しくなって黙っていました。（3ページ下へつづく）

発展途上国の実情が日本の国民に生々しく正確に伝えられぬのは，これら思慮を欠いてうすっぺらなジャーナリストにも責任があります。ペシャワールで見る限り，日本のジャーナリズムの程度の低さは世界屈指のものがあるといえます。しかし，このような態度――まるでコンピューターで合成されたような虚像を真実と取り替えてしまうことは，多かれすくなかれ，日本の社会に普通に見られるものではないでしょうか？　真実に対する好奇心と謙虚さの回復，といえば大袈裟でしょうが，真実の使徒たるべきJOCSも含め我々自身も注意しなければならないと思うこのごろです。